

作ることの “リアリティー”

田原 幸浩 (作家)

空は美しい。花も美しい。海も美しい。その気になれば僕らの身の回りには、いくらでも美しいものを見つける事ができる。数年前、インドネシアのバリ島を旅行中のある夕方、ウブドーの水田地帯を歩いた時の事を僕は忘れられない。世界は恐いくらいに美しかった。そこまで遠出をしなくても、たとえば金城町の石畳の近くには大アカギの見られる場所があるし、坂下には巨大なゴムの木がある。そこでは、京都生まれの僕にとってはちょっとおどろくぐらいの、亜熱帯の植物の生命力を見ることができる。最近僕は、自分の彼女の絵をよく描いているのだが、自分の描く絵そのものより、実際に生きている彼女の方が、どれだけかわいいか知れないと思う事がある。しかし、木は木、人間は人間、そして作品は作品だ。

アカギやゴムの大木が、僕にある種の生命力を感じさせてくれるのなら、僕は、まずその生命力に刺激を受けて作品を作りはじめるだろう。また、自分がある特定の人をかわいと思う気持ちが、僕とその人の関係によるところが大きいならば、僕はその関係を絵にしようとする

るだろう。

僕にとって一番大事なことは“作品が生きた人間によって作られたものだ”ということである。



「夜」 田原 幸浩作品

表現される空間や人物やモノは、それが表現されたものである、という、まさにそのことによって、多少にかかわらず虚構となるに違いない。しかし、僕自身が、その作品を作ったという行為自体は虚構ではなく、とても“リアル”な事と思われる。

木枠にキャンバスを張り、そのキャンバスの上に人の顔を描く、そうするとその人はどんな顔の人か、

- 1962 京都生まれ
京都市立芸術大学卒業
- 1988 那覇市に在住
- 1989 8・9月インドネシア バリ島に滞在
- 1990 個展 那覇市民ギャラリー
- 1991 個展 GALLERY WORK- II
- 1992 OREN AIR EXHIBITION (沖繩)
個展 GALLERY WORK- II
個展 GALLERY BAZAREZ (広島)

描いた僕とその人はどんな関係にあるのか、その人はどんな人で僕はどんな人なのか、というようなことを描く事になる。しかし、制作がそれだけでは終わらない事もある。

たとえば、何点かの絵を組み合わせて一つの作品にすると、今度は一つ一つの絵のモチーフよりも、その絵が(僕という)人間によって描かれたものである、という別の側面を強く見せてくれるようになる。

また、あるときは、絵具ののっている部分と、キャンバス地の見える部分とのコントラストや、キャンバスのかわりに使う板の材質感、また、異常に部厚く作られた支自体の重量感、そういったものが、やはり表面に現れた色や形を、描かれたものとして見せてくれることになる。もちろんそれだけではなく、もっといろいろな事がアトリエでは起こっている。こんな事をしながら、僕が形にしたいと思っているのは、世界とのかかわりあいのなかで起こった僕自身の心の動きだ。そして、それは僕自身がこの世界に生きていることを通じて表現できる、唯一のリアリティーであろうと思われる。

大きなゴムの木から、数えきれないくらいたくさんの葉っぱが伸びているのを見て、その生命感をすばらしいと思う時、僕は、その木の姿を写しとるよりも、僕自身その大きな木のようにありたいと思う。

作品は、その木から伸びる新しい枝であり葉っぱである。

明日作る作品が、これまでの作品と似たものになるかどうかはわからないが、生きている事と、作品を作る事に対しては、もっと、もっと“リアル”でありたいと思う。

(たけら 睦ひろ)



ひとにいつも新しく—生活共創企業

ゆゆうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270

國場組グループ

國和會

会長 國場 幸治

絵画の

崇高性と日常性

今、気になる作家知花均氏の制作に対する現場状況、崇高性、日常性…を美術評論で活躍中の翁長直樹氏と語ってもらった。

翁長：この間、県立芸大若手作家展を見てきたんだけど、知花さんの感想はどうですか？

知花：今回の若手作家展は芸大の企画委員会の第2回目の企画で、助手を中心とした若手メンバーで開催されたグループ展なんです。

陶芸、染織、絵画、デザインに分かれていて前回の29人展のミニバンのような感じなんです。

グループ展の性格上それぞれの作家がグループ展にどのようにしてかかわっていいのか、いろいろな意見が出たのですが、良い機会なので今回は個々が持っている内容を並べて見ようじゃないかということで開催したんです。

翁長：今回の知花さん自身の作品についてはどう思われますか。

知花：大きさについてはもっと大きい作品を作ってみようと思ったのですが、去年9月に、画廊沖繩（GALLERY WORK-II）のほうで個展をした延長線上で考えていて、サイズが80×80cmの正方形のパネルを横一列に4枚並べたのがいちばん大きなサイズだったので、その延長線上で考えると、いきなりは大きくはできなかったの、今回は9枚組

みを作ってみました。つまり、9枚の正方形のパネルを組み合わせて全体として大きな正方形になるようにしたんです。

最終的に画面をどのようにもっていくか、短期間の作業だったものだから、不十分な点も結果的にはあったんです。それは、部分と全体の関係で、一枚一枚の独立した空間のあり方を一枚の全体として見せる場合、相互の空間の密度をどの程度の調子幅にもっていけばいいのかという点です。

翁長：パネル組にすると部分という意識が強くなると思うんですけど、29人展のときは水平線が走っ



ていて、強く押し当てて描くという感じだったのが、色面を強調する感じになってきていると思うんですけど、それはさっき言ったように部分と関係しているんですか。

知花：線をおいたり、点をおいたりするのは面を意識することなんです。線を重層的におくことで面を意識するわけです。今回は、液体のもの

が流動的な要素があって、以前と比べて色面に対する感触はやわらかくなっている感じがします。

崇高性と日常性

翁長：話は変わるんだけど、以前に知花さんは崇高性のことについて話していたと思うんです。最近再び、崇高性ということが現代の美術シーンの中で浮かび上がってきているのですが、今度は崇高について聞かせてください。

知花：崇高性に対して、日常性という言葉があると思うんですね。僕自身が崇高性に関して考えだした

のが琉大の2年生の頃なんです。マーク・ロスコの作品や音楽で言えばベートーベンの曲に出合ったあたりからでした。ロスコについて画集、雑誌でしか知りませんでしたから、当時は寸法を見て想像したりして、そのスケールや色彩を感じようとしていたんです。

視覚的なものの背後に精神的なもの

絵画・デザイン用品・陶芸用小物・電動加・額縁制作

CULTURE PLAZA
株式会社 **みつや書店**
〒902 沖縄県那覇市壹屋1-1-3 ☎(098)863-1650

地元のビールが断然うまい、
最も新鮮

オリオンビール

のを感じ取ろうとしたり、それを求める気持ちは強かったと思います。

現在は崇高性については排除しているわけではないのですが、自分自身のこれまでの経験を通して、今は芸大という場所で制作をさせてもらっているんですけど、その中で日常性というものが大きくなってきているんです。

日常性という点はいろんな作家が扱っていますが、僕の場合は、自分の日常性の中で作品を問い直してみたいという意識があるんです。だから、以前の崇高性を全面に打ちだす作品とはだいぶ意識が変わってきていると思います。

翁長：画廊沖繩（昨年9月 WORK-II）での個展の辺りからわりと色面が意識されてきたんじゃないかと思うんですけど。

知花：テーマ性としての崇高性と、絵画性としての色面という問題は、それを言葉で結びつけて説明するのは難しいんです。

視覚性の問題で言えば、水の境界というテーマをあたえてやわらかい重層された色面の展開になっているんですけど。

翁長：視覚に写る景色とか、色面とか水辺が入ってくると、イメージがはいってくると思うんですけど、そ



の点はフォルマニズムにはこだわっていないんですね。

知花：今、イメージという言葉が出てきたんですけど、いろんな考え方があってと思うんです。

イリュージョンというのは排除しようと思っても排除し切れない要素だと思っんです。絵具をおいたり線や点をおく作業の中で、平面でのイリュージョンは自分の中で必要なものなんです。映像的な場合のイリュージョンで、線を置くことによってできる空間のイリュージョン、自分自身にとってはどれもおもしろい要素なんです。

色については、透明感のある色を重ねることによってできる空間、たとえば、海の底を見るような感じとか、空を見上げたような空間の感じとか、そういう見方ってあると思うんです。

僕の考えているイリュージョンというのは、再現的な意味でのイリュージョンではなくて、絵具や、線や、色面でできるような平面性を持ったイリュージョンなんです。

翁長：テーマ性、言葉での崇高性というのは、表現してみると違ってく

知花 均 (おが ひとし)

- 1961 沖縄に生まれる
- 1983 琉球大学美術工芸科卒業
- 1985 愛知県立芸術大学院油画科修士(グループ展)
- 1983 琉大卒業記念4人展(県民アートギャラリー)
- NEW E-W-L-L 版画展 (名古屋)
- 1984 第9回大学版画展(丸の内画廊/東京)
- NEW E-W-L-L 版画展 (名古屋)
- 1985 「ANOTHER SIDE」(名古屋)
- 1991 県立芸大29人展(那覇市民ギャラリー)
- オキナ コンボラリー 5人展(ギャラリー-WORK-II)
- 1993 県立芸大若手作家展(浦添美術館)
- 〈個展〉
- 1987 画廊匠(沖縄)
- 1990 ギャラリー1956(沖縄)
- 1991 ギャラリー-Q(銀座)
- 1992 ギャラリー-Q(銀座)
- ギャラリー-WORK-II



翁長 直樹 (おが なおき)

1951年沖縄県具志川生まれ。

大阪教育大学英語科入学。映画研究と放浪の末中退。琉球大学美術工芸科に入学。映画研究会にて制作上映。

1978～1982年まで東京芸大、和光大学にて美術史の聴講を受け、現代美術の研究に入る。

現在、開邦高校美術教諭。沖縄タイムス、琉球新報の美術評論で活躍中。

と思うんですけど、そういう意味での言葉に対する執着みたいなものがあるんですか。

知花：テーマ性としての言葉に執着はしていません。「水平線考」とか「水の境界」とか、最近では「水」という言葉が続いていますが、だからといってその言葉に執着してしまうということはありません。

崇高性についても同じだと思います。すごく精神的な部分ですし、感情の高まりそのものだと思いますし……。

崇高な感情とは

翁長：崇高性というのは感情の高まりというか、精神性の世界に入っていくことで、これは音楽の世界にも共通するものがあると思うんです。ロスコの作品なんかは崇高な感情を

CREATIVE OFFICE

SHINJO Vib CREATION

プランニング(企画)

S.V.C

マネージング(経営)

〒900 那覇市牧志2-13-15-501 ☎(098)867-9999



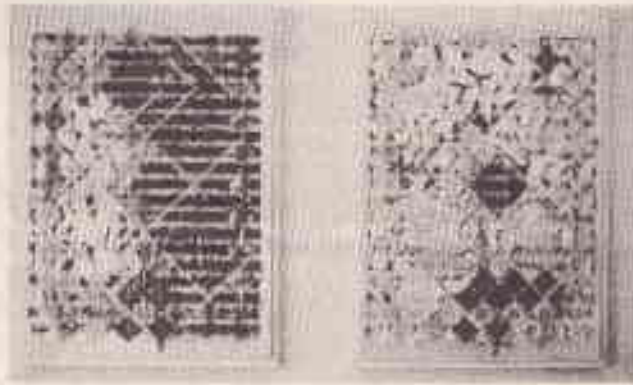
首里の銘酒(本場泡盛)瑞泉

瑞泉酒造株式会社

沖縄県那覇市首里崎山町1-35 TEL(098)884-1968

起こさせるというか、絵の前に立つと包み込まれて自分がなくなるとい
うか自己喪失してしまうくらいに絵
に取り込まれてしまう。

知花：僕が考えている崇高性という
のは、自分がなくなるのではなく
て、逆に自分を確認させられてしま
うというか、自分という存在が認識
されるものであって、目に見えない
大きな存在、自然の背後にあって、



「水平線考」 知花 均作品

目に見えないものと向かいあう自己
の確認という性質のものなんです。

翁長：近代、バスキアが『人間は考
える葦である』、宇宙の中のたった
ひとつの葦でしかないといったんだ
けれど、自分自身が大きな宇宙
の存在の中の一つであることで逆に
自分というものを意識してしまう。

近代は自分を個として認識してい
き、大きな自然と自分が対峙するこ
とから崇高性という言葉が生まれて
きたと思うんです。

個ができたことで自然や他に対し
ての認識ができてくる。でも、モダ
ニズムが終焉すると言われていたけ
れど、人間が描いた絵は近代が作り
上げてきた人間像の描いてきた絵で
しかない。ポストモダニズムと言う
と思うんだけど、そこには今まで
考えてきた一個の人間像みたいなも
ので、人間は単なる関係でしか
ない。

現代社会を見ると近代は変わって
きていると思うんですけど。そ
の中で、作家が自己の核のようなも
のを掘り下げて表現することが理念
として変わってきているように感じ
るんです。

知花：今関係でしかないとおっ
しゃったけれど、僕自身が現在、
ハードルと課していることにも、そ
の辺と同じ考えがあるんです。例え

ば、異なる空間を並べることによっ
て初めて見えてくる内容といった事
柄にしても、とても興味を持っている
んです。さっきここに来るまでに
いくつかの道を通ってきて、その中
でいろんな風景があって、だから自
分に風景ってなんだって聞かれたら、
特定の風景を指すのではなくて、複
数の風景の関係、その間にある内
容について興味がある。そういう
言い方になってしまうと思うん
です。つまり、その関係性が見えて
くることによってもっと何かがわか
てくるというか、冷静になれるん
じゃないか、という気がするんです。
並べてみることで初めて見えて
くるもの、そのあたりのことを考
えながら制作しているんです。

翁長：作者の最初の意図を考
え、並べてみることで関係性がみ
えてきて作品がひとり歩きするとい
うか、作品がテキストになるという

か、そういう意味での面白みはある
と思います。だから、パネルをいく
つか使うというのは関係性を意識し
ていて、それがどういう形になるか
楽しみなところですよ。

知花：作品を作っていくなかで、部
分と全体という問題をどう考えるが
課題だと思っています。

翁長：パネルを並べたりするのは構
想の部分で、頭で考えることですよ
ね。手作業の部分との関係はどう
なっているんですか。

知花：まず初めにパネルに下地を
作って、絵具が吸い込まないように
して、床において絵具を注ぐように
してパネルに置いていくんです。そ
のときに筆ではなくてスキージーの
ようなもので、水たまりを広げてい
くように色面を作っていくんです。
それを、何回か重ねて色面を作っ
ていくんです。

翁長：その作業をしていく中で偶然
性というのはあるんですか。

知花：偶然性とは違うと思いま
すが、操作的な部分は捨てていま
せんが、絵具のもつ流動性が心地よく
仕事をしているというところあり
ます。

翁長：コンテを使って、線をいれ
ていく作業が以前の崇高という言葉
とぴったり合っていた感じがするし、
今は日常性というのとぴったりあ
うと思うんです。

知花：あのかの作品では線を引
いて、次にどこに線をいれるか、ブ
レッシャーを感じながらやっていた
時期で、線が次の線を呼び起こすよ
うな空間に持っていきかかったん
です。描いていく一つ一つの線の行
為が厚みとなって、面を意識させ
たり、線そのものとしても存在感の
あるものにしたかかったんです。

翁長：線の集積で空間を作ってい
るんですね。偶然性というか、いまの

RISTORANTE
松尾亭

〒900 那覇市松尾1-5-7 (松尾グランドホテル)
予約/TEL (0988) 62-6161
年中無休

* 額縁の専門店 *

合資
会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(098)867-4811 FAX(098)861-0367

プロセスと違うような感じがして、作者の意図というかコンセプトがありながらやってくというか、前の線に対して次の線が生まれてくるんだろうけど、精神性というかストイックな感じがします。

話は変わるんだけど、材料でコーヒーを使ったのはなにか意味があるんですか。

知花：コーヒーとの出会いというのは絵具との出会いと一緒になんですけれど、染料に近い透明感が気に入って使っています。他にもコーヒーを使っている作家はいると思うんですけど、必ずしも絵を描くのが市販の絵具でなくてもいいと思うんです。コーヒーを使い出したのは3、4年前なんです。定着の問題とかいろいろ問題があって、作品として発表し出したのは、一昨年ぐらいからです。

翁長：グリッドの話聞かせてほしいんだけど。

知花：以前の作品では 平行で等間隔の横の帯状の黒い線を同じ太さで引いていて、ひとつの形を作っていたんです。それに、縦のドロ잉が加わって、だんだんと深くなって交差するようにして、45度の線をいれて網目上に重ねていきました。横の線をなくして45度に交互に重ねていくグリッドになってきているんです。以前と比べると空間が違って見えると思うんですけど、今の作品は俯瞰するような、上から見るような感じで、横に線が入っていた時期よりも自由に空間が作れるんです。

翁長：帯状の水平線が入っているときは、遮断されるような感じだったけれど、グリッドが入ってからは解放された感じがしたというか。

知花：当時の作品については、自分がほしい結果とうまくかみ合わなかったんです。

翁長：すっきり見えたというか、赤い線が入っているんだけど、前の線と違って感じる感じがしましたね。

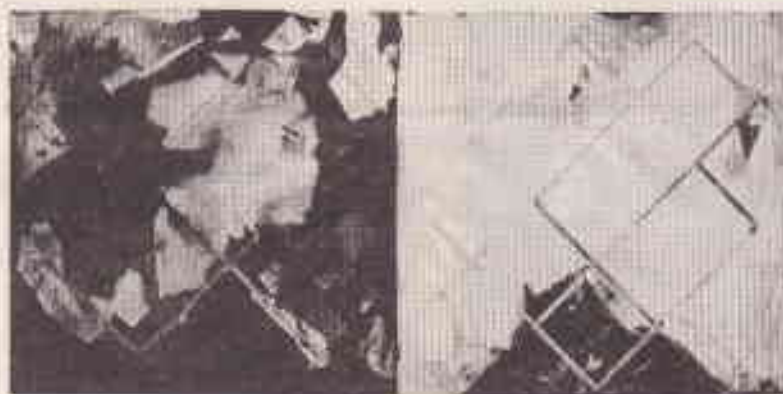
社会との関係

翁長：以前と比べると沈滞気味で文学と芸術を比較するとジャンルが違うと思うんですけど、文学は言葉のゆえか最初からコミュニケーションとしてみると社会性を獲得していると思うんですね。だけど、美術というのはオリジナルで、見る機会が

会の一員として作家もいるわけだし、社会を意識しない作家はいないと思うんです。みんなに見てもらいたいという気持ちを持っている作家が普通だと思うんですね。でも、ある特定の人を意識した作家活動というのものもあるのかもしれない。

社会性を獲得する、しないという問題は、必ずしも美術と関係するとは思いません。でも難しい問題ですね。

作家は自分の真実というのを作品として出すわけですから、作品の品位を高め、作品としての価値を高め



知花 均作品

どうしても限られてくるという点があると思いますね。でも最近は美術のジャンルが広がってきて、映像とかを含めて美術と見た場合、かなりのメディアとして強みがでてくると思うんです。そういうメディアの広がりみたいなものを取りこむ作家がでてくれば広義の意味で社会性を獲得できるんじゃないかな。

知花：アンディ・ウォーホルはメディアを作品として取り込んだ作家として重要ですが、当然、マスメディアを通じて広範囲に渡ってマスメディアを獲得しました。だからといって我々が獲得しようという社会性って何なのか。大勢だから社会と呼べるのか、数の問題でもないような気がするんです。

社会性という問題については、社

た段階で見もらって、見る側の反応に対して興味をもったりするわけです。そして、そこで初めて対話というのを持とうとするわけです。作家の作っていくという作業は自分ひとりだし、孤独な作業なんです。

翁長：今後の展望について聞かせてくれますか。

知花：12月に東京の(ギャラリー-Q)という画廊で個展をする予定です。東京では、3回目の個展なんですけれど、これから継続して続けていきたいと思っています。

翁長：知花さんはしっかりと足場を固め一步一步確実に進んでいっている感じで、これからの制作が楽しみです。今日はどうもありがとうございました。



OCS FESTIVAL THEATER

- オークスフェスティバルシアター
- TEL 098-868-9894
- 国際通りフェスティバルビル6F
- バンド・演劇等、出場者募集中!

GALLERY WORK-II

2-2-4 IZUMIZAKI NAHA
OKINAWA JAPAN 〒900
Phone 098(855)7933

幸地 学展

◆5/25(火)～30(日)
◆三越ギャラリー(5F)

昨年東京展に引き続き、故郷沖縄での3年ぶりの個展。オリジナル18点(水彩、オイルパステル)新作が加わりました。



GALLERY WORK-II
— 企画予定 —

PRINT WORKS-13

県内作家13人による版画展
◆PART-I 5/10(月)～15(土)
◆PART-II 5/17(月)～22(土)

「りゅうせき美術賞」展

今年で第4回目を向える「琉石美術賞」は新人の作家を発掘する公募展として定着しています。公募内容は下記の通りです。

- ◆絵画=題材、出品点数自由 (ただし未発表作品)
 - ◆サイズ=30号～50号(910×606mm～1167×909mm)の範囲、変形可
 - ◆資格=沖縄出身者および県内在住者
 - ◆搬入=8月1・2日
 - ◆賞=大賞 1点 100万円、入賞 5点 各40万円
- ※詳しい問い合わせ先
株式会社イムス ☎098(836)1863

OFT

オークスフェスティバルシアター

5月スケジュール
《映画》

- 5/1～2 ◆チャックベリー・ヘイル・ヘイル・ロックロール
 - 3 ◆鉄腕アトム・アニメ ※手塚治虫
 - 4 ◆新宝島・アニメ アニメシリーズ
 - 5 ◆ジャングル大帝・アニメ
 - 6～9 ◆ジミ・クリフ/ボンゴマン
 - 17～23 ◆ジャック・ベッケル「穴」
 - 24～30 ◆スーパーフォークソング・矢野顕子《バラエティー》
 - 5/10 ◆第6回むつみ橋市民大学講(男と女の事件簿) 照屋寛徳
 - 13 ◆仲本政國ジャズ・オーケストラ LIVE
 - 14 ◆JUMPING PARADISE LIVE
 - 15 ◆YAMAKO LIVE
 - 16 ◆DAY-BAND LIVE
- 昨年11月にオープンしたオークスフェスティバルシアター 皆さんの御存じでしょうか。他ではめったに観れない映画の上映される大人の空間です。詳しい内容は下記の連絡先まで。
フェスティバル6F ☎(098)868-989

ギャラリーウーマン

向きを変え始めた
“キャリアウーマン”

去年の10月に恋焦がれてやまなかった NEW YORK へ渡った。私は N. Y へ足を踏み入れた途端、今までに味わったことのない緊張感が身体中に走り、一瞬にして雑踏の中をカッポする“ウチナンチュ・ニュー Yorker”になりきってしまった。しかし、摩天楼をスニーカーでさっそうと歩く本場のキャリアウーマンを見たら、それが少し萎縮してしまった。

何かの記事で70年代にアメリカでウーマンリブ運動家として活躍していた女優の J・フォンダが、現在の夫の内助の功宣言をしてフェミニスト団体のひんしゅくを買ったと知った。確かに彼女だけでなく90年代に

入って、一部の女性の意識が微妙に変化してきているように思える。

そもそも女性は、子供を出産する機能を持ち、男性に比べて母性本能を持ち備えているのに、今までそれを押し殺すような形で男性と肩を並べる女性が多かった。しかし、実際に男性と女性は能力ひとつをとっても各々に向き、不向きがあり、肩を並べたところで大した意味はないと思いはじめているのだろうか? 何はともあれ、女性は戦闘意識を持続させるのが苦手だということは間違いないだろう。

私はニューヨークにいるようなキャリアウーマンが女性の理想の姿だと信じていたのだが、もしかすると、昔からそのスタイルを変えずにいるたくましく、優しい沖縄のアンマーの方が本当の意味でのキャリアウーマンと言えるのではないだろうか。(金城和美)

編集デスク

初めて試みたギャラリーボイスの編集、大変だとはわかっていたが、こんなにも時間がかかるとは思ってもいかなかった。その中でも、テープおこしは慣れないワープロに向かって、ただひたすら会話をうち続けるという孤独な作業……。いいものを出そうと思うと、よけいに作業が進まなくなってしまうのだが、とにかく始めてしまった以上、16号を発刊するまで寝る暇をおしんで頑張るしかない、眉間にしわがよる、焦りは顔の表情も変えてしまう。

内容に重点を置き、スリムに反ビジュアルな情報紙をと、初心でスタートしたギャラリーボイス紙、これからも、充実した内容ある情報にしていきたいと考えています。

皆さんからの率直な声、寄稿、投稿をお待ちしています。

(当間)

Adlib 広告制作事務所
アドリブ
〒901-21 浦添市宇勢理客527 ☎0988(77)6535



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市堂崎2-2-3 ☎098(834)6760